シリーズ 回想 広報イベントの思い出 (100)

令和４年度国際観艦式フリートウィーク広報イベント

海上幕僚監部広報室　２等海佐　**荒牧　泰輔**

海上自衛隊の観艦式は、自衛隊の最高指揮官である内閣総理大臣に日頃の訓練の成果を観閲していただくことを目的とし、陸上自衛隊の観閲式、航空自衛隊の航空観閲式を３自衛隊持ち回りで実施することから、３年に１度の行事となっています。

令和４年度は、海上自衛隊創設70周年の節目として、創設50周年以来２回目の国際観艦式を開催しました。

前回は東京湾で停泊形式でしたが、今回は相模湾での航行形式とし、12カ国の艦艇と２カ国の航空機が参加しました。

観艦式は毎回、抽選で選ばれた一般のお客さまにも乗艦いただき好評を得ていますが、令和４年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、乗艦者を関係者に限定し、国民の皆さまへのお披露目はYouTubeでのライブ配信のみとなりました。

観艦式はその性質上、文字通り「海上」で実施されるため、乗艦された方のみという制約を受けます。

このため、毎年、観艦式の前後に「フリートウィーク」と題し全国で艦艇一般公開などのイベントを催し、できるだけ多くの人々に海上自衛隊の艦艇や装備品を触れてもらい、隊員と交流する機会を提供しています。

私が担当したのは、横浜赤レンガ倉庫パークで開催した「広報イベント」です。隊員や有名タレントなどが出演するステージイベントのほか、物販ブース、また、横浜に停泊した艦艇の一般公開に参加していただいた方への海自グッズ抽選ブースなどを設け、令和４年11月３日から５日の間、開催しました。

広報イベントの準備は早期に開催場所を選定し、予約や関係各機関等との調整を開始する必要があり、１年前の11月から開始しました。

毎回、横浜赤レンガ倉庫パークで開催しているので「今年も同じで良いか…」と楽観していた私に、横浜市の担当から「フリートウィーク期間は、赤レンガ倉庫の補修工事が予定されており、建物は閉鎖されている。お店も営業していない」という驚愕の話が舞い込んできました。

赤レンガ倉庫は、横浜でも有数の観光スポットであり、週末ともなると全国から多くの観光客が訪れます。年間650万人、単純計算で毎日１・７万人の来場者があるため「赤レンガのお客さまが広報イベントに来てくれるだろうから、集客戦略はあまり考えなくていいや」という私の目論みは、早々に崩れ去りました。

横浜港での艦艇一般公開との兼ね合いも考慮すると、赤レンガ倉庫パークが最適であることは明白だったので、場所は赤レンガ倉庫パークとすることにしました。

有名タレントによる一日艦長やステージでのトークショー、SNSでの事前告知等々で集客できないか、と頭を悩ませていたところ、横浜市担当から「赤レンガで、海自イベントと同期間に文化放送主催の『ふるさとフェア』が開催される予定」との情報を得ました。

「ふるさとフェア」は、全国の物産を集めたイベントであり、毎日２～３万人程度の集客があるとのこと。さらに、主催者から「エリアの住み分けが可能であり、同時に開催していただいて構いません」とのお言葉もいただきました。

これは願ってもないチャンス。「ふるさとフェア」のお客さまをこちらへ誘導すれば、集客が見込めるという希望の光が見えた瞬間でした。

その後は、横浜市をはじめ関係機関との調整、イベント業者の選定、ステージイベントの演目検討、出演者との調整等々、あっという間に時が流れました。

ステージイベントは、国際観艦式ということで「国際色を出す」ことと「来場者参加型で親しみやすさをアピール」という２点をテーマとしました。

「国際色」は、国際観艦式に参加する各国の国旗をあしらったステージデザインとし、外国音楽の演奏、ヨガ体験や米海軍第７艦隊軍楽隊演奏を企画することで表現することにしました。

来場者も一緒に「海上自衛隊第１体操」

「来場者参加型」は、海上自衛隊第１体操を来場者と一緒に実施したり、子供と隊員とのミニゲームや、横浜港停泊艦艇による電灯艦飾の点灯号令を来場者にかけていただいたりするイベントを考えました。

また、有名タレントによる１日艦長トークショーは、なかやまきんに君さんと内田理央さんを起用し、横浜に停泊した艦艇での１日艦長業務の合間に、赤レンガの広報イベントステージで隊員とのトークショーなどを企画しました。

さらに、東京音楽隊による演奏、下総のミニＰ－３Ｃ部隊の阿波踊り連、那覇からはエイサー部、そしてまさかの防衛医科大学校チアダンス部まで、盛りだくさんのイベントとしました。

いずれのステージイベントも大盛況であり、３日間で11・７万人の来場者がありました。これは、前回のフリートウィーク広報イベントを上回る数字であり、所期の目的を十分に達成したと考えています。

来場者であふれる会場の様子

この要因は次のとおりだと考えています。

その１は「有名タレント起用と事前告知」です。海上自衛隊のSNSを活用した事前告知はもちろん実施しました。

なかやまきんに君さんには、事前に護衛艦「いずも」乗員との筋肉対決を含むYouTubeをご自身のチャンネルで配信していただき、その再生回数は１００万回を超えました。

内田理央さんは自身がパーソナリティを務めるラジオ番組やご自身のSNSで告知してくださいました。ちなみに、私も３本のラジオ番組に出演し、事前告知を行いました。

これらにより、多くの方の目や耳に触れる機会を得ることができたと考えています。

その２は「ふるさとフェアとの同時開催」です。赤レンガ倉庫の工事による店舗の閉鎖は集客に大きな障害を生む要因でしたが、ふるさとフェアの集客力は安定しており、前述の結果を得ることができました。

また、来場者から「ふるさとフェアに来たら、隣でステージイベントやってたので見に来た。面白い。予定にはなかったが、護衛艦の見学にも行ってみようと思う」との声が多くありました。

その３は「隊員の熱意」です。ステージイベントに出演した隊員は、総員が熱意をもって臨んでくれました。「広報の重要性」を認識してのことではありますが「成果を発表できる場」としての側面もあり、これが良い方向に作用しました。

練習して練度を上げても、それを発表する場がなければモチベーションは上がりませんし、宝の持ち腐れになってしまいます。

少しでも来場者に楽しんでもらおうという熱意は来場者にしっかり伝わり、会場は大盛り上がりでした。業務の合間に時間を作って練習してくれた隊員たちに感謝です。

次回の観艦式は、令和７年度になると思います。ぜひ、観艦式本番のみでなく、フリートウィーク、広報イベントにも足を運んでいただき、募集対象者はもちろん、ご家族の皆さまにも、海上自衛隊への親しみと理解を深めていただければと思います。

「筆者紹介」

荒牧（あらまき）　泰輔（たいすけ）

・昭和52年生　福岡県出身
・一般大02幹候
・固定翼操縦士
（Ｐ－３Ｃ・ＵＳ－２）
・主要部隊歴等
Ｈ13　海上自衛隊入隊
Ｈ14　一般幹部候補生学校
Ｈ17　第５航空隊
Ｈ21　派遣海賊対処行動航空隊
Ｈ23　バーレーン航空連絡官
Ｈ24　海幕総務課渉外班
Ｈ25　第71航空隊
Ｈ28　統幕人事教育課補任班
Ｈ30　第71航空隊
Ｒ３　海幕総務課広報室

「自衛隊の学校・今昔物語」㉖

航空自衛隊・第13飛行教育団

１　第13飛行教育団が所在する芦屋基地

Ｔ－４練習機

第13飛行教育団は、福岡県の航空自衛隊芦屋基地に所在しております。芦屋基地は、福岡県の北側に位置し、東京ドーム92個分の広さを持つ航空自衛隊で３番目に大きな敷地面積を有する基地です。

芦屋基地は、太平洋戦争中の昭和17年、本土防空の重要防護目標（小倉および八幡地区など）の近傍に位置していたため、防空飛行部隊の配備基地として好適と判断され、海岸線に連なる三里松原を切り開き、陸軍飛行場として発足しました。

終戦後は、米軍による使用が開始され、朝鮮戦争時には輸送拠点および爆撃機の発進基地となりました。昭和35年11月には米軍は撤退し、その後、航空自衛隊臨時芦屋基地隊が編成され、昭和37年には現在の芦屋基地の原型が完成しております。

現在も、芦屋基地内には、旧軍時代の航空機掩体や米軍が使用していた建物など多くの史跡が残っており、古くから歴史に刻まれた基地であることが推測できます。

また、現在芦屋基地では、滑走路長を約１６００㍍から約１７８０㍍に延長するための事業が着々と進められています。本事業は、航空機の高性能化への対応や離着陸時の安全性確保等の目的から計画が開始され、延長された滑走路で運用が令和７年度から開始される予定です。

本事業の開始に当たっては、周辺自治体等の皆さまの懸念である塩害による農作物被害を防ぐため、高さ８㍍、長さ４１０㍍の防潮柵を海岸線沿いに設置しております。防潮柵は、上空から見ると、それほど大きな施設に見えませんが、間近で見ると圧倒されるほどの大きさです。本事業は周辺自治体などの皆さまの航空自衛隊に対するご理解によって成り立っていることを深く認識し、引き続き安全運航に心掛けていきたいと思います。

２　第13飛行教育団について

（１）第13飛行教育団の歴史

第13飛行教育団は、航空自衛隊の教育を担う航空教育集団の飛行教育団の１つです。

昭和34年に宇都宮で第13飛行教育団が創設され、当時の使用機種は米軍から供与を受けたＴ－６でした。昭和35年に岐阜（移動訓練隊）においてＴ－１ジェット練習機による操縦教育を開始。昭和37年に宇都宮から現在の芦屋基地に移転し、Ｔ－１による教育準備を経て、同年、司令部を芦屋基地に移動しました。以後、所在部隊の新編、改編等、幾多の変遷をたどりながら現在に至っています。また、航空機もＴ－６、Ｔ－１、そしてＴ－４と世代が交代し、その間、多くの航空自衛隊の操縦者養成任務に携わってきました。

（２）基本操縦（Ｔ－４）前期課程

第13飛行教育団は、基本操縦（Ｔ－４）前期課程として、初級操縦（Ｔ－７）課程を修了した操縦学生に対し教育を実施しています。

本課程に入校した学生は、卒業までに約24週の教育を受けます。学生は、本課程で初めてジェット機に搭乗し、速度、機動性など、新たな感覚を体感していくこととなります。教育目標は、基本的な操縦法を概成させると共に、操縦訓練に必要な知識を習得させ、航空従事者技能証明取得に必要な知識を向上、維持させることです。加えて、戦闘操縦者として心・技・体の調和のとれた人格形成の基礎を育成することです。

教育に使用する航空機は、航空自衛隊が保有するＴ－４（中等練習機）です。Ｔ－４は、昭和56年から開発が着手され、昭和60年度から62年度の間に技術・実用試験が実施されました。縦列複座の航空機で、脱出装置のキャノピー破砕方式や機上酸素発生装置を備え、さらに機体には炭素複合材などの新技術を採用しており、信頼性および整備性に優れた純国産の双発ジェット航空機です。

現在の航空自衛隊のほとんどの戦闘機パイロットが本航空機で飛行訓練を実施しており、航空自衛隊のパイロットにとっては、基本教育を受ける学生から、定年退官するベテラン操縦士までが搭乗する相棒のような航空機です。

ア　飛行教育

基本操縦（Ｔ－４）前期課程においては、各種操作を通じて航空機の特性を把握し、航空機の性能を最大限に発揮し得る操縦能力を習得します。

訓練課目としては、①実際に航空機に搭乗する前に各種手順や緊急操作を演練するためのシミュレータ訓練、②空中感覚および空中判断力を向上させる離着陸空中操作訓練、③航空機の姿勢、高度、位置および針路の測定を計器にのみに依存して行う計器飛行訓練、④編隊飛行の基本的な操縦法、手順および精神的要素を習得させる編隊飛行訓練、⑤夜間における操縦能力を習得させる夜間飛行訓練、以上大きく５種類の訓練を行います。

特に、課程開始後約３カ月で待望かつ難関の初度単独飛行に臨むことになるため、学生は定められた期間内に技量を向上する必要があります。

前課程で使用したターボプロップ機のＴ－７とは機動性、操縦特性が異なり、操縦技量を身につける際に戸惑うこともありますが、卒業する頃には入校時と比べ逞しく成長して巣立って行きます。

イ　学科教育

学科課目は、Ｔ－４航空機の一般的な性能や機体構造および電気系統などの航空機取扱法から、航空法、航空力学、英語に加え幹部自衛官として必要な防衛学および任務遂行上必要な心構えにかかる精神教育と多岐にわたります。学生は、基本操縦（Ｔ－４）前期課程卒業後は、後述する浜松基地で実施される課程で、航空従事者技能証明を取得するための試験を受験するため、飛行訓練と並行して必要な知識を向上・維持に励むこととなります。

３　課程修了後

基本操縦（Ｔ－４）前期課程を修了した学生は、基本操縦（Ｔ－４）後期課程（浜松）に進みます。

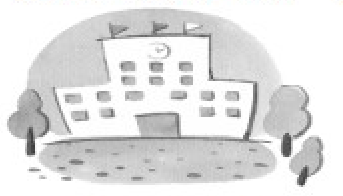
第13飛行教育団で培った操縦技量と知識を後期課程ではさらに進化および拡大させ、学生は操縦者としてステップアップすることが求められます。そして後期課程を卒業時に、念願の航空自衛隊操縦士の証であるウイングマークを取得します。

ウイングマーク取得後も引き続き多くの訓練を経て作戦部隊に配属され、その後第一線部隊で活躍していくことになります。

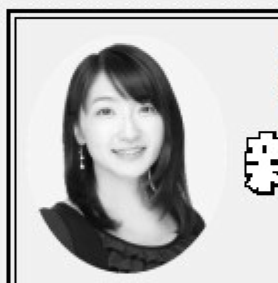
４　その他

芦屋基地の北の外側には、遠賀・宗像自転車道と呼ばれるサイクリングロードが整備されています。この自転車道に沿って樹齢数百年という広大な松原および白い砂丘で形成された美しい海岸が広がっており、砂丘の白とエメラルドグリーンに輝く海面の揺らめきは、この地域が昔から福岡県における白砂青松の名所であることを教えてくれます。

サイクリングロードは滑走路近傍にあり、航空機が海側からの着陸進入経路となる場合、手が届きそうなほど間近でＴ－４をご覧いただけます。進入するＴ－４の前席には一生懸命操縦する学生が搭乗しています。サイクリングの際にもし見かけた場合は、温かい目で見守っていただけたら幸いであります。



美佐の新国防論 (149)



全ては「戦友」のために

最近、自衛隊で事故・事件が続いていることから、自衛隊は一体どうなっているのか、適正に欠ける隊員がいるのかと問われることがあります。

そんな時にはよく「自衛隊は社会の縮図」で、今の世の中を反映しているといったことを話すのですが、考えてみるとそのほうが問題で、日本人の心に何か欠けているということでもあり、わが国の教育現場の危機をむしろ感じています。

一方、自衛隊は一般社会とは異なる大きな特徴があります。それは、自衛官にとっての仲間とは、単なる職場の同僚でもなく、学校の友達でもない「戦友」だということです。

私は旧陸・海軍の方々と親しくさせていただいていましたが、陸軍関係の多くの方々が好んでいた歌が「戦友」でした。

たまたま同じ部隊にいただけかもしれないが、その人の死に目に居合わせるかもしれない、あるいは自分の最期を見届ける相手かもしれないというのが「戦友」なのです。

戦友は亡骸を拾ってくれるかもしれません。家族に勇ましい戦いぶりを伝えに行ってくれるかもしれません。気が合うか合わないかは関係ないのです。

国防に従事する人の関係とは、そういうものなのではないでしょうか。

戦後一貫して「戦友」のために生きてきた方々がたくさんいました。[illegible]

[illegible]

7月の新暦のお盆に靖国神社では「みたままつり」が行われますが、これは昭和21年に長野県遺族会の有志の方々が上京し、自発的に神社内で盆踊りをしたのがはじまりだったそうです。

最近「みたままつり」に[illegible]

（執筆者プロフィール）

桜林　美佐

（さくらばやし　みさ）

東京都生まれ。日本大学芸術学部卒。ディレクターとしてテレビ番組を制作した後、防衛問題研究家に。著書に「奇跡の船『宗谷』」「海をひらく」[illegible]「誰も語らなかった防衛産業」（並木書房）、「ありがとう、金剛丸」[illegible]「日本に自衛隊がいてよかった」（産経新聞出版）、「自衛隊の経済学」（イースト新書）、「危機迫る日本の防衛産業」（産経NF文庫）など多数。

きずな

「五講四美」の教え

副会長　**荒木　肇**

このごろ、よく昔をなつかしく思い出します。学生の頃、儒教の教えや、江戸時代の私塾の学風などについて学びました。今も心に残るのが「五講四美（ごこうしび）」という言葉です。

「講」というのは人の集団のことをいいます。昔のことですが、伊勢大社にお参りする伊勢講、富士登山の富士講などが知られていました。その講が、すべての人にとって良いものになる、つまり講が良く機能するには、友情・互恵・信義・礼儀・規範の五つが大切だというのです。

集団は友情によって結ばれます。友情に支えられて互恵が生まれ、その互恵をより強くする絆（きずな）として信義が大切になります。また集団が円滑に動くためには礼儀が必要であり、組織が維持されるためには規範が必要です。

では四美とは何でしょうか。講に集う人それぞれにとって大切な美のことでした。動静（立ち居振る舞い）が美しく、品性（人柄）が豊かで、言語（言葉づかい）が粗野でなく適切であり、態度（判断）が道理にかなっていて誰からも納得されること。

一人一人は集団の影響を受けます。逆に集団はそれをつくる個人によって左右されます。個と集団は相互に作用します。学級や職場のことを考えればすぐに分かります。たとえば「いじめ」のある集団の人間は互いに疑い、恐れ、意地悪になっているものです。

和辻哲郎氏は「人間」という言葉について「欧米語のMANは個体としての人しか意味しない。中国語では世間とか世の中という意味になる。ところが日本語の場合では、世の中であると同時に、その世の中における人を指す」と述べています。

わたしたちは、ふだんの暮らしの中で、いたずらに[illegible]主義に走り過ぎていないでしょうか。[illegible]

[illegible]